

## 聖なる空間の建築記述：文字、絵図、立体 ——熊野神倉権現社の記録を中心に——

松 崎 照 明

小論では日本建築の記述方法と熊野新宮（和歌山県新宮市）に所在する神倉神社（古くは神倉社、神倉権現社、以下神倉社と表記する）の建築に関する様々な記述による旧建物の復元の可能性について検討する。

周知の通り、熊野は平安時代以来の日本における代表的な聖地で、本宮、新宮、那智の三つの聖域から成る。神倉社はこのうちの新宮を熊野川から守る神倉山（標高120m）山上に鎮座する、熊野信仰の一つの起源と目される磐座（ゴトビキ岩）が起源で、神倉山山麓の新宮大社は元宮の神倉神社に対する新しい宮である「新宮」とする見方もある。

この神倉神社ゴトビキ岩の前面には巨大な懸造の拝殿が存在したのだが、明治初年に倒壊し、その全容が不明になっている。この建物は熊野を聖地たらしめた修験者（山伏）の修行や熊野信仰を全国に広めた聖たちが所持、頒布した熊野牛王の作成にかかわる重要な建築で、その具体的な姿を様々な記述から明らかにすることは大きな意味があると思われる。またこの建物に関する記述を、出来る限り収集し明確にする方法は建築に関する記述の意味を再考するのにも重要な役割を果たすはずである。

日本建築に関する記述の方法は時代によって変化し、その記述方法による時代判定も可能であるから、神倉社の建築について考察する前に、日本建築の基本的な記述方法の変遷を通覧し、その特徴を指摘する。

### I 日本建築の記述

現在の建築は、基本的に平面図、立面図、断面図の図面で表記されるが、歴史的な日本建築の記述方法を見ると、文字による表記、図面（指図、建地割図）、模型（雛形）、絵画（絵図、絵巻、参詣曼荼羅など）の四分野に大別出来よう<sup>(1)</sup>。

#### 1. 文字による記述

飛鳥・奈良時代の記述は、基本的に実際の寸法により、建物の長手方向「長（桁行）」と短手方向の「広（梁行）」、柱高「高」での表現だったようで、この実寸による記述は元慶7年（883）観心寺資材帳の書かれた頃が最後かと考えられている<sup>(2)</sup>。これが奈良時代の後半には、柱と柱の間（柱間）を一間（いっけん）と数える柱間の数表記が中心になり、その中でも建物の中心部分である身舎（母屋）の正面柱間と母屋の何面に庇の空間が付属するかという「間面記法」で表記されるに至る<sup>(3)</sup>。この記述方法は簡略化され10世紀中葉には「○間○面」と表記されるようになる。例えば「三間四面」は母屋正面三間、側面二間の四方に一間巾の庇が付

く、全体で正面五間側面四間の建物を表す。

次に平安時代から南北朝時代には「○間○面」の記述方法が基本になるが、南北朝末期を下限に使われなくなる<sup>(4)</sup>。

14世紀初期からは、正面と側面（奥行）の間数による表記が主流になり、室町、安土桃山、江戸時代まで続く<sup>(5)</sup>。

## 2. 図面表記

次に図面による表記だが、柱を立てる位置を点で表記し、それを線で結んで建物の平面図とする指図（さしず）が江戸時代まで主流だった。指図は、寺院建築が伝来した飛鳥時代には既にあったと思われるが、現存最古例は延暦元年（782）以前に書かれたと推定される「東大寺殿堂図」しかない。寺社は時代によって各種の建築の作り方、形式が決まっており、規模が決まると建物のおおよその形が決定するので、指図があれば立面図が無くとも普通の建築は作ることが出来た。ただ特殊な建築については、姿図が無いと分からないので、建物の立面図に相当（場合によっては断面図も付属）する建地割図（たてじわりず）が描かれた。建地割図は享禄4年（1531）の「善光寺造営図」が最古である<sup>(6)</sup>。

## 3. 雛形（ひながた、模型）

雛形は建物を作る上での手本になる模型や形式、様式を示す見本のことを言う。江戸時代になると秘伝書であった木割書（木碎き）が木版刷りで一般の職人向けに出版されるようになり、これを雛形本と呼んだ。中世までの雛形は殆ど模型で塔など特別な建築を作る場合に作られた。高い建物、巨大な建物は実際の建物の強度や建て方（構法）、使用材などを具体的に確認したかったので雛形（模型）が作られたと考えられている<sup>(7)</sup>。

## 4. 起し絵図

立面図、室内展開図を各面ごとに厚手の紙に描き、平面図を描いた台紙に張付け組立てたり折り畳んだりできるようにした立体的な図で、江戸時代後期から末期に盛んに作られた。茶室書院建築の起し絵図が多いが、城郭や民家もある<sup>(8)</sup>。起し絵図の多くは建築を作るための試作ではなく、既存の有名建築を記録する或いは「写す」ために作られたと考えられる。

## 5. 絵画史料

領地境界を示す四至図、榜示絵図や縁起絵巻、参詣曼荼羅、名所図会など絵に描かれた建築の史料。最古のものは天平勝宝8年（756）作成の「東大寺山堺四至図」で、東大寺の伽藍地を示す。図中には大仏殿、戒壇院、絹索堂、千手堂などの建物が描かれているが、描写は単純化され、位置については重要な情報が得られるが建物自体の詳細は分からない。「高野山水屏風」（京都国立美術館蔵、鎌倉時代）、「神護寺絵図」寛喜2年（1230）など鎌倉時代に描かれた絵図（神護寺は榜示図）には建築の形がかなり詳しく描写され建築の立地、周辺景観とともに

に規模、形態についてかなりの情報が得られる。

絵巻では実在の人物について描かれたものが重要で、『法然上人絵伝』（知恩院蔵、1306－1308）、『親鸞上人絵伝』（西本願寺本、永仁3年1295）、『一遍聖絵』（歓喜光寺、正安元年1299）などがある。このうち各地の代表的な寺社（聖地）を描いた『一遍聖絵』の諸建築は実景に近いという見方があったが、藤井恵介の研究<sup>(9)</sup>により、かなり類型化されており、実際の建物を描いたとは考えにくいとされている。

参詣曼荼羅、名所図会等に描かれる建物も描写は象徴的に抽象化されており、実際の建築とは齟齬が大きいとする見方が主流である。

以上、建築に関する記述を通覧してきたが、文字による表記、図面（指図、建地割図）、模型（雛形）、起こし絵図までは、建築を作る、写す、あるいは存在する建築を記録、報告するための資料という性格が強い。この中の文字表記、図面の特徴は、「○間○面」と記す面間面記法では母屋正面は表記するが側面は通常2間のため表記しておらず、柱間「間（けん）」の使用に際しても一間の寸法が建築の種類、時代、地方によって異なるということである。つまり日本建築を作る際に使用されたと考えられる、かなり専門的な記述方法であった間（けん）も状況に応じて使い分けられているのである。また指図も平面のみの記述で、立面図が添えられるのはごく特殊な建築に限られ、平面に対する立面は建築の種類、時代、地域、建造を担当する職人の知る様式などによって異なり、かなり曖昧な部分を含んでいる。

これに対して絵画史料（絵図、絵巻、参詣曼荼羅など）は建築の外形を描くが、抽象化された表現が多く客観性に欠けるとされ、これまでの建築研究では使用されなくはないが二次資料の扱いが多く、むしろ信憑性を疑うことが前提になっていた。しかし、上記のように客観的表記とされる文字、図面表記の特徴が曖昧なことにあるとすれば、絵画史料を二次資料と見なすこの視点は、歴史的な建築を十全に捉え得たのだろうか。これを検討するために実際の事例（神倉社）を考察することで、これまでの研究方法の問題と史料の見方の新しい可能性について検討してみる。

## Ⅱ 神倉社の建築

まず神倉社の現状について述べると、旧社殿のあったゴトビキ岩の前面には大正時代に建てられた本殿一棟が在るだけで、本殿の建築形式、向き、拝殿が無い事など旧来の建築とは著しく異なっている。しかし、神倉社については多くの記録があるので、まずは建築に関する史料（文字、絵図など）を管見の限り挙げてみる（別表）。

### 1. 社殿の存在を示す記述（史料）

はじめに、神社建築の一般的な造営過程を述べておくと、神を祀るための正殿（本殿）が作られ、その後、礼拝・儀式に使われる拝殿（礼殿）が増設される<sup>(10)</sup>。

熊野の建築に関する纏った且つ信憑性のある記録は、甲斐守藤原忠重らが熊野権現社寮領を侵したことを熊野所司が民部省に訴えた時に提出した資料である『長寛勘文』（長寛元年1163）で、その中の「熊野権現御垂迹縁起」に「熊野新宮乃南農神蔵峰降給。」と、神蔵峰への降臨については記述があるが、神倉社の造営に関する記述は無い。年表の孝昭23年（BC453）に「神倉社壇建立」と朱雀元年（686）「裸形上人社壇建立」、天平6年（734）「大地震にて神倉社破る」、同8年に「千貫比丘尼立之」とあるが、「長寛勘文」に記述が無いことから考えると、これら奈良時代の造営に関する記事は単なる伝承と考えられる。これに対して元慶5年（881）と延喜2年（902）の記録は、直接建築の造営を言わないが神倉での修行を記す。熊野では既に奈良時代に修行僧が山中で修行をしており<sup>(11)</sup>、真言宗の傑僧「聖宝」の修行はともかく、平安時代における神倉山での修験僧の存在を想わせる。続く永保2年（1082）「神倉堂（高倉下命天照大神）」と大治3年（1128）「白河院・・・当時御造営」は、後述する二棟の本殿と拝殿の造営を表すかと思われるが同時代の記録が無く不明とせざるを得ない。ただ、本宮、新宮、那智では遅くとも天仁2年（1109）までには本殿前方にかなり大きな礼殿があった事が分かっており<sup>(12)</sup>、本殿のみ或いは小規模な拝殿が付属した神倉社の存在を12世紀前半まで遡らせることも不可能ではない。その後、建久4年（1193）頼朝「再興、神倉社壇成就」、元久元年（1204）炎上、承元4年（1210）再建、寛元2年（1244）炎上、宝治2年（1248）再建と記述は続くが、これも今のところ確証が無い。

神倉社の建物の確実な存在が分かるのは13世紀半ばで建長2年（1250）頃成立の『続古今和歌集』藤原実氏の和歌と『吾妻鏡』の同3年記事の「熊野神倉焼亡」で、これらは京都の貴族、鎌倉幕府の記録だから、この頃までには建物が建てられていたことが判明する。また同6年『経俊卿記』には「入堂して馴子舞を行う」とあるので拝殿の存在が推定できる。その後は、応安7年（1374）炎上、康生元年（1455）大地震倒壊、文明6年（1474）再建、享禄4年再興、天文16年（1588）炎上、同18年造営、享保17年（1732）再建と大正7年（1918）の倒壊まで、何度も炎上倒壊と再建再興を繰り返している。

## 2. 拝殿の建築形式を示す記述（史料）

### A 外部形態

鎌倉、室町時代における建物の外観を描く史料にはクリーブランド美術館蔵の『熊野宮曼荼羅』（鎌倉時代、図1）と『一遍聖絵』（1299年、図2）、フーリア美術館蔵『熊野宮曼荼羅』（室町時代頃）がある。『熊野宮曼荼羅クリーブランド本』は平入で桁行5間か、梁間不明、懸造の拝殿を、『一遍聖絵』は切妻造、桁行不明、梁間2間、懸造、『熊野宮曼荼羅フーリア本』は本殿二棟と切妻造、平入、桁行5間、梁間2間の建物を描く。フーリア本の拝殿は懸造に描かれていないが、三史料とも拝殿が桁行5間、梁間2間、切妻造、平入の建物と推定すれば齟齬が無い。また、フーリア本が拝殿と別棟二棟の本殿建築を描くことには留意すべきで、神倉社の建築が本殿二棟と拝殿によって構成されていた事を示す可能性がある<sup>(13)</sup>。江戸時代の史料





図1 『熊野宮曼荼羅クリーブランド本』部分

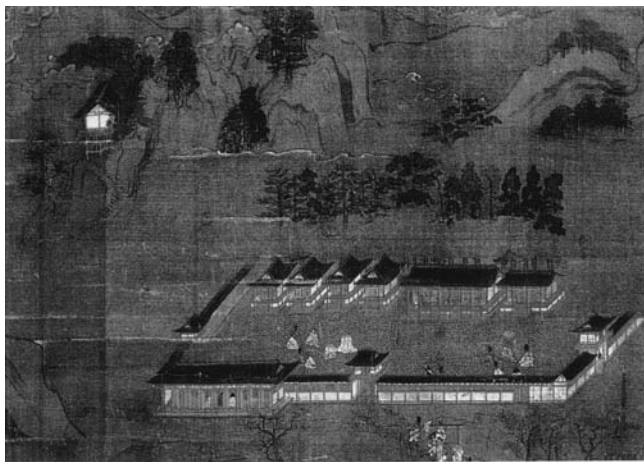


図2 『一遍聖絵』部分



図3 「熊野神倉山古絵図」



図4 『新宮本社末社図』部分

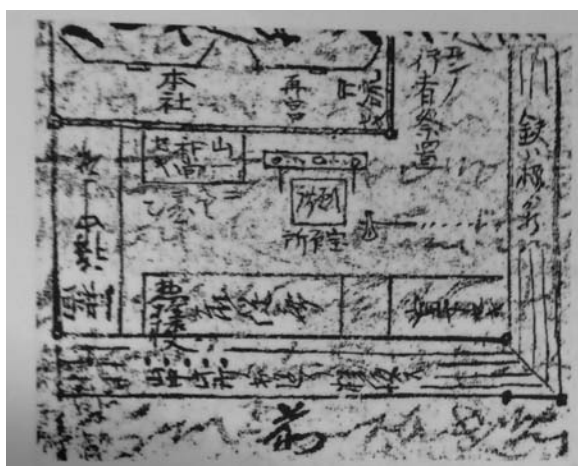


図5 『神倉旧記録』所収平面

では『西国三十三名所図会』（1853年）と「熊野神倉山古絵図」（1854年頃か、図3）、『新宮本社末社図』（1854、図4）が神倉社を描き、名所図会は説明文に「神倉権現社 本殿六間に五間、棧造」とあり、神倉山古絵図には桁行6間、梁間6間、縁柱付、入母屋造、平入、懸造の建物が、末社図には桁行7間、梁間4間、入母屋造、平入、懸造の建物が描かれている。

## B 平面

拝殿の平面について最も古い記述は享禄4年（1531）再建建物の「桁行十一間、梁間六間」である。これは一般の拝殿建築に比べると異常な大きさだが、当寺の熊野新宮大社や本宮大社の礼堂（拝殿、礼殿とも言う）もほぼ同様の大きさだったことを考えると不自然ではない<sup>(14)</sup>。寛永10年（1633）、寛文9年（1669）の記録「面十一間に六間（各七尺間）」、「桁行拾貳間五尺五寸九分、梁行五間三尺壹寸五分（但七間八尺間）」、文化8年（1811）「広さ十一間に七間」、天保10年（1839）「十二間五尺五寸四余、五間三尺一寸余」も多少の違いはあるが「桁行十一間、

梁間六間」ほどの大きさであった事を示している。また、近年の調査によってこの規模に相当する礎石も確認されている。次に上記『西国三十三名所図会』と「熊野神倉山古図」、「新宮本社末社図」の「六間に五間」、「桁行6間、梁間6間」、「桁行7間、梁間4間」の記述と描写だが、「十二間五尺五寸四余、五間三尺一寸余」とする天保10年（1839）と「六間に五間」とする嘉永6年（1853）の間に再建の記録は無いものの、三史料に同様の記述がある事を考えると、この時期に再建が行われ、規模が縮小された可能性が高い。天田愚庵『巡礼日記』の「近き頃迄は六間に十間の社殿」は天保10年頃まで存在した巨大な拝殿についての聞き書きであろう。

ところで、寛永10年（1633）と天保10年（1839）の記録「高倉下命 地主権現 三堂作 面十一間に六間（各七尺間、檼瓦葺） 宮殿（彩色塗金物、檜皮葺） 天照大神 並ノ宮（千木、勝尾木）」と「神倉社 六尺三寸余、七尺八寸 祀神高倉下命 並宮 四尺四寸、四尺八寸 拝殿 十二間五尺五寸余、五間三尺一寸余」の記述を見ると神倉社には本殿が二棟あり、それとは別に拝殿が記されており、その平面は一般の拝殿とは異なっていたことが分かる。これについては『神倉旧記録』（文化6年<1809>、図5）に拝殿内部の見取り図が載せられており、拝殿内部奥のゴトビキ岩に向かって左側に地主神高倉下神を祀る本殿、右側に天照大神を祀る並宮が二棟並んで描かれている。

### C ゴトビキ岩と建築との関係

『神倉旧記録』の内部見取図は本殿、並宮の後部を描かないが、前掲「新宮本社末社図」の建物をよく見ると平入の拝殿屋根の後ろにゴトビキ岩に向かって大棟を直角に出した屋根がある。これは、本殿、並宮を覆う屋根と思われ、神倉社の建物は本殿、並宮部分が後部に突出し、その前面に拝殿が付く形式になっていた事を示唆する。このような平面形式は日吉大社摂社八王子社、三宮社の社殿など山岳信仰に特有なもので、はじめに本殿部分の小社が作られ、その後の修行者、儀式、参詣者の増加に対応して拝殿の建築が付加、拡大されたものである<sup>(15)</sup>。

このように考えると、年表の永保2年（1082）「神倉堂（高倉下尊 天照大神）」までの記録は、本殿、並宮だけが建てられており、大治3年（1128）の後白河院参籠と書かれた頃に拝殿が増築されたと推定することも不可能ではない。

## III 結論

以上、神倉社に関する記述から

- 1 神倉社の本殿は11世紀末から12世紀初頭には創建され、この頃までには本殿と並宮の二棟になっていた可能性がある。
- 2 拝殿は遅くとも建長6年（1254）までには建てられており、その規模は鎌倉時代には桁行5間、梁間2間ほど、享祿4年（1531）以後には桁行11間、梁間6間程度、嘉永6年（1853）頃には桁行6間、梁間5間ほどで、形式は基本的に平入で後部に本殿、並宮が突出する平面を持ち、床下は柱を長く伸ばした懸造の形式だったことが判明する。

またこれまでの論考から、形式化された建物の図を張り付けるように描かれた可能性が高いとする研究のある『一遍聖絵』でも、熊野のような特別な聖地の場合は実景が描かれている可能性が高く、名所図会なども熊野のように平安時代から江戸時代まで数多くの参詣者を集め続けた聖地の建築では、網羅的に収集、分析すればかなり有用な史料になりえることがわかる<sup>(16)</sup>。ただ、このような調査には当該地域に残る史料の詳しい知識が必要であり、地元根を張って調査を続ける地域研究者の協力が大きな力になることも付言しなければならない<sup>(17)</sup>。

## 註

- (1) 濱島正士『設計図が語る古建築の世界』彰国社、1992年
- (2) 間面記法については、足立康「中古に於ける建築平面の記法」考古学雑誌 23 の 8、1933年8月、太田博太郎「構造と意匠」『建築学大系第4巻日本建築史』所収、川上貢「間面記法の崩壊」日本建築学会論文報告集 64 号所収、1960年2月、三浦正幸「間面記法の運用に関する考察」『佛教藝術』270号所収、2003年9月参照  
寺院と神社建築の二例を挙げれば以下になる。法隆寺『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』天平19年(747)西院の一部「塔一基 五重 高十六丈 堂二口 一口金堂 二重 長四丈七尺五寸広三丈六尺五寸 柱高一丈二尺六寸」、皇太(伊勢)神宮正殿『皇太神宮儀式帳』延暦23年(804)「正殿壱区 長三丈六尺 広一丈八尺 高一丈一尺 御橋一枚 長六尺 広五尺 高蘭四方廻 高三尺広二尺五寸」(この記録は平安時代初期の史料だが、この表記は遅くとも奈良時代には始まっていたと考えられる)。
- (3) 『正倉院文書』の天宝宝字6年(762)石山寺仏堂(本堂)造営に際し既存の堂(長五丈、広二丈)を壊し新たに「仏殿壱宇五間在四方庇」とある。
- (4) 実例を示せば東大寺大仏殿について『七大寺巡礼私記』保延6年(1140)は「七間四面、有(裳)層」と記し、『南無阿弥陀仏作善集』(建仁3年1203)には「大佛殿 九間四面・・・」などとある。
- (5) 建物の作り方を書いた木割書の古例『匠明』慶長13年(1608)をあげると、「社記集」には「向妻あるいは平作一間社、二間社・・・九間社、五間四面大社・・・(出雲大社、天照皇太神宮(伊勢神宮)は実寸で別記)」、「堂記集」には「三間四面堂、五間四面堂、十一間四面堂(古代中世の間面記法とは異なり面は方に相当、三間四面堂は正面三間側面三間の建物を示す)」とある。
- (6) 指図(さしず、平面図)に関する記述は『殿暦』天永3年(1112)藤原忠実が春日社五重塔(西塔)を計画した際、「指図」によって塔を建てる位置を検討させたと言う記述が最古で、原因では「東大寺殿堂図」東大寺創建時の配置図僧房完成延暦元年(782)以前の講堂、三面僧房、食堂院を麻布に方眼を引き各建物の外郭を太線で描いたもの(縮尺約百分の一)、鎌倉建長寺の伽藍全体を描いた「建長寺指図」元弘元年(1331)、神社では「宇佐宮上宮仮殿地判指図」鎌倉時代(14世紀初頭の写し)が古い。
- (7) 雛形に関する記録は『元興寺資材帳』の法興寺(飛鳥寺)推古天皇4年(596)完成の19年前百濟から寺工、露盤博士、瓦博士、画工とともに「金堂ノ本様」献上の記事があり、この「本様」は雛形であった可能性がある。実際に雛形(模型)が作られた記録は西大寺八角九重塔、勝光明院御堂にあり、現存する事例には元興寺五重小塔(奈良時代 高さ約5.5m)などの塔、城郭の天守雛形である小田原城天守雛形(4基3種類、宝永3年1706再建計画か)などがある。
- (8) 古いものでは『大工頭中井家資料』の「諸方囲数寄屋建地割目録并仕立方仕候名前書卯九月」の33点、これを写した可能性のある『数寄屋絵図集』松平定信(衆翁1758～1892)全59点などがある。



- (9) 藤井恵介「絵巻物の建築図は信頼できるか：『一遍上人絵伝』の寺院・神社図を通して考える」小泉和子ほか編『絵巻物の建築を読む』所収、東京大学出版会、1996年
- (10) 神社の拝殿が作られた事分かる史料は北野天満宮の拝殿に関する天徳4年(960)が最古である。
- (11) 『日本霊異記』下巻第一「法華経を憶持する者の舌、曝りたる鬚髯の中に著きて朽ちざる縁」など
- (12) 『中右記』天仁2年(1109)本宮、早玉、那智での「礼殿経供養」の記事
- (13) 松崎照明「天川弁才天社拝殿・神倉権現社拝殿について」『日本建築学会学術講演梗概集』1990年所収
- (14) 永正五年(1508)11月の「古今熊野記録聖護院門跡雑掌重謹言上」に本宮「拾三間之礼殿」とあり、「本宮御社指図申の極月写」には正面13間側面10間の礼殿が描れる。
- (15) 松崎照明『山に立つ神と仏——柱立てと懸造の心性史——』講談社、2020年
- (16) 小論では触れなかったが、貴族や一般の参詣者の記録には、建築に対する体験と実感が数多く記されており、各時代、各階層における聖地、建築の見方がかなり良く分かる。これは日本建築の意匠研究において重要な分析対象になると考えられる。
- (17) 小論でも、建築形式を確定する鍵になった『神倉旧記録』の内部見取図と礎石調査は地元で熊野信仰研究を続けられる山本殖生氏の御教示によるものである。

## 年表 「神倉社の建築に関する記述」

\* 資料名のないものは『神倉伝記並妙心寺由緒言上』明治4年（1871）による。

番	年代	資料	内容
1	孝昭23年（BC453）	『神倉旧記録』	神倉社壇建立 奉造立神庫宮社、従是神殿初作也
2	朱雀元年（686）		裸形上人出生、登神倉、社壇を建立し仏閣造営
3	天平6年（734）5月		大地震にて神倉社破る。
4	〃 8年（736）正月		造営 千貫比丘尼立之
5	元慶5年（881）8月	『熊野年代記』	聖宝神倉於熊岳窟一七日昼夜修法苦行
6	延喜2年（902）	〃	聖宝上人熊野奥ニ入蛇の斬り池ヲ祭ル。上人 為僧正神倉ニ籠三日夜
7	承保元年（1074）	〃	神倉大馬産田牛鼻小社各成就 飛鳥遷宮日次ノ勅書来ル 神倉末社築成
8	永保2年（1082）	熊野伝記鏡谷之響	神倉堂（高倉下尊 天照大神）
9	大治3年（1128）	「妙心寺由来」	白河院当寺に御籠之節、神妙なる御霊夢を得 させ給ひ、依之当時御造営
10	建久4年（1193）		大將軍鎌倉大旦那源頼朝公より熊野神社再興、 神倉社壇成就
11	元久元年（1204）12月		三十日 神倉炎上
12	承元4年（1210）正月		神倉再建事始、8月棟上、11月造営悉成
13	寛元2年（1244）10月		神倉炎上
14	宝治2年（1248）		神倉社造進
15	建長2年（1250）か？	『続古今和歌集』	三熊野の 神くらやまのいしだたみ のぼり はてても猶いのるかな 藤原実氏
16	建長3年（1251） 4月14日	『吾妻鏡』 3月7日条	熊野山神倉焼亡
17	建長6年（1254）	『経俊卿記』	吉田経俊が神倉に一堂して馴子舞を行う
18	鎌倉時代	『熊野宮曼荼羅クリーブ ランド本』	（絵図）桁行5間以上（5間か）、平入、梁間 不明、懸造
19	正安元年（1299）	『一遍聖絵』	（絵図）切妻造、桁行不明、梁間2間、懸造
20	応永5年（1398）11月	『妙心寺文書』	伊勢大杉出身の慶覚が神倉山で捨身の行法を 行う 『神倉旧記録』に詳細有り
21	〃 7年（1374）正月	「熊野山新宮社務注進状 案」	神蔵御宝殿今日八日丑刻炎上、神殿、宝蔵、 御神宝悉以無残所・・・ 当番衆 大先達幸厳 小先達長尊 逐電
22	〃 34年（1427）10月	『熊野詣日記』	三日 神の蔵に御まいりあり、北野殿すくに 御下向
23	康正元年（1455）12月		大地震にて神倉社堂崩
24	文明6年（1474）		神倉義尚公御建立
25	室町時代頃	『熊野宮曼荼羅フーリア 本』	（絵図）本殿2棟、拝殿 切妻造、平入、桁 行5間 梁間2間
26	延徳元年（1489）	『熊野年代記』	妙心尼寺の妙順尼が神倉社再興の勧進を行う

27	享禄4年(1531)8月	「神倉社再造由緒」	神倉社再興成る。桁行11間、梁間6間 本願妙心尼寺の住持職妙順と弟子の祐信は配下の熊野比丘尼とともに大永年中から享禄4年8月に至る10年間「諸壇国勸化奉加」した。
28	天文16年(1588)		新宮神倉炎上 本山派修験一和尚の楽浄坊行満、当山派修験妙心寺祐信、金蔵房らが九州へ勧進に行く。
29	〃 18年(1590)		秀吉公より黄金百五十枚を給、・・・造営成就
30	元禄14年(1701)序	『熊野見聞記』	神倉 並宮天照大神 本堂は山上にあり、かけ作にして東南向、堂の広さ六間、長さ十一間
31	寛永2年(1625)	『熊野案内記』	本堂に出づ、堂は五間に七間、懸作也
32	〃 10年(1633)	『神倉旧記録』	高倉下命 地主権現 三堂作 面十一間に六間(各七尺間、横瓦葺) 宮殿(彩色塗金物、檜皮葺) 天照大神 並ノ宮(千木、勝尾木)
33	寛文9年(1669)	「熊野山新宮本社諸末社堂塔殿門等間数書」	神倉本堂 桁行拾貳間五尺五寸九分、梁行五間三尺壹寸五分、屋柵板葺 但七間八尺間
34	享保17年(1732)		神倉社再建
35	文化元年(1804)	『金谷上人行状記』	神の倉御参詣、大きな巖が宮のうしろにあり、これを神の倉といい、天照大神宮と大己貴命の二座を祀る
36	〃 6年(1809)1月	『神倉旧記録』	8日条 神倉社内部見取図 間数不明、建物の二面のみに縁付属、本殿、並宮前面のみ拝殿内に突出
37	〃 8年(1811)	『紀伊国名所図会』	堂の広さ十一間に七間・・・堂の縁より見下せば・・・
38	文政5年(1822)		屋根こけら葺から瓦葺に変更
39	天保10年(1839)	『紀伊続風土記』	本殿と並宮は巖窟の内にあり、拝殿は懸作なり。神倉社 六尺三寸余 七尺八寸 祀神 高倉下命 並宮 四尺四寸 四尺八寸 拝殿 十二間五尺五寸余 五間三尺一寸余
40	嘉永6年(1853)	『西国三十三所名所図会』	神倉権現社 本社六間に五間、棧造(かけづくり)
41	〃 7年(1854)頃か	「熊野神倉山古絵図」	(絵図) 桁行6間 梁間6間 縁柱付 入母屋造 平入 懸造
42	〃 7年(1854)	「新宮本社末社図」	(絵図) 桁行7間 梁間4間 入母屋造 平入 懸造 背後に棟連結
43	明治26年(1893)	『巡礼日記』 天田愚庵	近き頃迄は六間に十間の社殿を其の巖に組み掛けて珍しき結構なりしとぞ、今はささやかなる祠堂を其跡に立てたり。
44	大正7年(1918)	『新宮市誌』	神倉社 明治初年倒壊、現在は大正7年2月旧社殿より北方裏手に仮に営まれた本殿(春日造一間社)のみ。

